

日独食文化比較

— 「屋外食」から見る文化的価値観の相違 —

外国語学部 国際文化交流学科 4年

今川 さくら

1.はじめに

「海外」という言葉からどのようなものを想像するだろうか。人によってイメージは異なるであろうが、少なくとも一定の割合でテラス席に座り優雅にコーヒーを飲みながら世間話をしている外国人の絵を想像する人がいるのではなかろうか。

このテラス席をはじめとした屋外での飲食というテーマで本論文を執筆するに至ったきっかけは、一年間のドイツへの留学中に日本の食文化とドイツの食文化の興味深い違いを発見したことである。ドイツではカフェやレストランといった空間にテラス席が多く設置されており、ドイツ人たちは天候や環境に関係なく外の席に座ることに違和感を覚えた。なぜなら、日本では、テラス席を利用している客を見かけることがほとんどないからである。ましてや、冬の寒い日や夏の猛暑日はテラス席を利用しようとする客は、ほぼ存在しない。

また、テラス席のみを提供している観光地のカフェにおいても、外国人観光客と日本人が選択する座席とでは比較的明確な違いがみられた。外国人客は通路など動線付近にあるテラス席や、パラソルが立っていない席であっても気にせず利用するようであった。

こうした違いには、建築上の法律的制限や、天候の特徴といった要件も十分に影響していると考えられるが、理由はそれだけではなく、「文化」や「価値観」といった両国の人々の心に沁みつく何らかの行動原理があるのではなかろうか。これらのことから、本稿では「屋外で食べること」¹（以降「屋外食」と略す）に関する価値観の違いをテーマとする。

このような両国の人々の価値観の相違などを主題とし、日独の比較研究を行っている先行文献は数多く存在する。例えば、岩村²は言語・交通・境・宗教・ジェ

ンダーといった多様なトピックを皮切りに、ドイツ社会の仕組みとそれを作り上げているドイツ人の考え方を歴史的、文化的背景から読み解いている。

ドイツでジャーナリストとして活躍する熊谷は、ドイツの日常生活のあらゆるトピックをドイツ在住の筆者自身の経験から語っている。中でも、『びっくり先進国ドイツ』³では、ドイツ人の几帳面で合理的且つ個人主義的な性格について、章を設けて詳しく説明している。同じように、リチャード・ロー⁴は、ドイツの国柄、ドイツ人の価値観や人間性、考え方について、日本的価値観との対比と彼らの日常的な習慣から解き明かし、異文化間コミュニケーションをより円滑に行うことを目的としている。

このように、日独の比較研究を行っている論文は存在するが、テーマを食文化に絞った研究は限られている。今村⁵は、ドイツの日常食である「カルテス・エッセン」の背景にある考え方や哲学をヒントに、多忙を極める日本人の生活にゆとりや豊かさを与えることを趣旨とした著書を出している。加えて、近藤⁶は、ドイツと日本の家屋の比較を通して、それらの特徴が食事空間に与えた影響、特に家族の団欒に与えた影響について研究している。以上に紹介した、日独の比較研究本において「食文化」は数あるトピックの中の1つに過ぎず、その背景や由来まで深く掘り下げた記述はない。また、今村、近藤ともに日独の食文化を扱っているが、「屋外食」に関する記述は見られない。

しかし、先行研究の欠如はそのテーマが無意味であることとは決して結びつかない。なぜなら、日本とドイツの比較を「屋外食」という新しい観点から行うことは、両国の食文化や習慣の違いとそれを形成する背景の文化的価値観を究明し、自文化を改めて真に理解することができるからである。

2.日本人アンケート分析

この章では、日本人の回答内容を分析し、日本人に特徴的な回答の傾向を明確にすることを目的とする。研究の方法は、アンケート調査である。アンケートの実施要領については、インターネット（75名）と紙媒体（247名）を利用して日本人計322名に実施した。対象者の年齢層は10代後半から20代に限定しており、大多数が大学生である。実施期間は2019年8月後半から9月末までの約1か月間で、本学の講義やゼミナールなどの機会を利用して行った。インターネットでのアンケートは、筆者の知り合いや身内、友人などを通して協力を要請した。実際に行ったアンケート資料については参考資料として本稿の末尾に添付してある。

まず、屋外で食べることに関する質問項目についての分析を行う。テラス席の利用頻度を問う設問1では、テラス席を「めったに利用しない」と答えたのが159名と最も多かった。次いで「たまに利用する」が126名、「利用したことがない」が19名、「よく利用する」が15名であった。「めったに利用しない」と「利用したことがない」の回答者数を合わせると178名と過半数以上がテラス席を積極的に利用していないことがわかる。また「よく利用する」と回答したのが、たったの15名であったことも特徴的である。

次に、各状況によつての「テラス席」か「室内席」の座席選択の嗜好を問う設問3では、室内席とテラス席が両方空いている場合、273名が「室内席」、32名が「テラス席」を選択した。室内席のみ空席がある場合は、同様に283名が「室内席」を選択し、1名のみが「テラス席（待つ）」を選択した。反対にテラス席のみ空席がある場合には231名が「テラス席」を利用すると回答し、31名は「室内席（待つ）」、18名がお店自体を「あきらめる」と回答した。つまり49名がテラス席のみが空いている状況でも、その利用を拒否している。

テラス席の利用状況とシチュエーション別の利用嗜好についてより深く知るために、次に設問1と設問3を組み合わせた分析を行う。設問1で「たまに利用する」と答えた126名のうち「テラス席のみ空席がある」という状況の時のみ、「テラス席を利用する」と回答している人が101名と全体の8割を超えている。

同じように、「めったに利用しない」と回答した159名のうち「テラス席のみ空席がある」という状況でのみ110名が「テラス席」を選択したが、その状況であれば「あきらめる」と回答した者が14名いた。また「テラス席と室内席両方空席がある」場合でも、「たまに利用する」では92名と8割以上、そして「めったに利用しない」では137名と9割以上が「室内席」を選択した。これらの結果、「たまに利用する」と回答した人々も大半はやむを得ない状況でのみテラス席を利用し、室内席が空いていればそちらを選ぶ傾向を持つことが分かる。つまり「よく利用する」と回答した人々以外は全てテラス席の利用に消極的であり、日本人がテラス席よりも室内席を好む傾向にあることを示している。

設問2では、設問1でテラス席を積極的に利用しないと回答した理由を聞いた。その結果最も多く選ばれたのは「天気や天候に影響されるから」（119名）であった。その他、順に「落ち着かない」（55名）、「自分が食べている姿・食べているものを見られたくない」（21名）、「他人に気取っていると思われたくない」（4名）、「外で食べることはマナー違反」（1名）という結果となった。

同じく自然観に関して、「屋外食」をするための条件について問う設問5では、票が多い順に「ベンチや机などの状態・清潔さ」（242名）、「虫がいそうかどうか」（192名）、同数で「居心地の良さ」（192名）、「日陰の有無」（180名）、「景色の良さ」（90名）、「人通りの少なさ」（63名）、「静かさ」（51名）、「自然の多さ」（30名）という結果となった。加えて、設問7では228名が小雨程度であってもパラソル付きのテラス席を「利用しない」と回答している。（「利用する」は92名）

テラス席で他者からの視線を気にするか問う設問4では、歩行者の視線を「気にする」と答えたのが111名であったが、それを上回る207名が「気にしない」と回答している。「気にしない」理由として、「赤の他人だから」という系統の記述が多く見られた。

「屋外食」の位置づけを問う設問6では、173名が「屋外食」を「非日常」、残り半数弱の149名が「日常」と位置付けた。

次に、屋外で歩きながら食べること⁷ (以降「歩き食べ」と略す) に関して、質問項目の回答傾向を見ていく。第一に、「歩き食べ」の頻度に関する設問8では、最も多い150名が「たまにする」と回答した。他の回答は多い順に、「よくする」(77名)、「あまりしない」(66名)、「非常によくする」(18名)、「全くしない」(8名)と続いた。合わせて245名という大多数が「たまにする」、「よくする」、「非常によくする」という「歩き食べ」を比較的頻繁に行うことから、若い世代での「歩き食べ」は習慣化していることがうかがえる。

この傾向は、設問11で「歩き食べ」がマナー違反であるかという問いに過半数以上の216名が「いいえ」で回答し、残り99名が「はい」と答えていることから推測できる。

「歩き食べ」をして注意を受けた経験を問う設問12では、77名が経験があると回答した。他方、243名という全体の約7割が注意されることがないと回答している。注意をしてきた人として挙げられたのは、「親」(28名)、「学校関連」(27名)、「親戚」(7名)、「友人」(10名)、「赤の他人」(3名)であった。一定数は注意を受けた経験があり、中でも「親」や「先生」、「部活動の顧問」が多く挙げられていたことである。

また、どのような「歩き食べ」のシチュエーションで恥を感じるのかについて(設問9)は、「観光地でソフトクリームを歩き食べ」にはおよそ全体数である309名が「気にならない」と回答した。(「恥ずかしい」7名) その状況を除いては、「恥ずかしい」と感じる人が一定数いた。「通学中にリンゴ(丸かじり)を歩き食べ」を250名が「恥ずかしい」と回答し(「気にならない」65名)、次いで「駅のホームでハンバーガーを歩き食べ」は198名が「恥ずかしい」、118名が「気にならない」と回答した。「学内でおにぎりを歩き食べ」に対して、約半数の144名が「恥ずかしい」と答えた。(「気にならない」171名)

それに対して、設問10で友人が隣で共に「歩き食べ」をしている場合は、「恥ずかしくない」と答えたのが234名と、「恥ずかしい」と答えた45名を大きく上回った。

これまで、2つの項目に分けてアンケートの分析を

行ったが、最後に全体に見られる日本人独特の傾向をまとめておきたい。第一に、日本人はテラス席を頻繁に利用せず、更にはテラス席の利用を忌避する傾向がある。その理由として、設問2で自然要素が多く挙げられていたことから、第二に日本人の自然に対する価値観が肯定的ではないことが推測できる。また、若年層で「歩き食べ」が日常化している一方で、周りにいる人や食べ物などの状況によっては「恥ずかしい」と感じる傾向にあることが指摘できる。状況に加えて、集団心理も日本人の「屋外食」に対する価値観を探るうえでキーワードとなるだろう。

3. ドイツ人のインタビュー分析

この章では、ドイツ人に行ったインタビューの回答分析を行う。インタビューの結果の分析を通じて、「屋外食」に対するドイツ人の価値観を把握する。

対象としたのはドイツ国籍を持ち、且つ、大学生であるドイツ人であり、全員が20歳から25歳の年代である。移民大国であるという国家の事情を配慮し、インタビューを行ったドイツ人として規定する根拠としてドイツでの在在歴を挙げる。まず、5名中3名はドイツで出生し、ドイツで育てられた生粋のドイツ人であるといえる。残り2名のうち1名は、両親がベトナム国籍を所有しているが生まれも育ちもドイツであり、ドイツ的な教育や価値観の中で育った。もう1名は、ドイツとガーナのハーフであるため、ドイツでの在在歴は8年と比較的短い。ガーナでもドイツ系のインターナショナルスクールに通学していたため教育や主要言語はドイツ語やドイツ的価値観の中で行われたといえる。

インタビューは、比較を容易にするために日本人へのアンケートと同じ質問に沿い、日本語、ドイツ語、英語を用いて行った。実施期間は8月から9月の2か月間で随時、電話にて質問した。うち時間の確保が困難な2名は、事前にインターネットのアンケートフォーム上で回答をもらい、後日電話にて回答結果に対するフォローアップの質問を行った。尚、以下の文章では必要に応じてアンケートの設問番号を用いて説明を行うこととする。

留学やワーキングホリデーを通して日本経験がすでにあるドイツ人に対してインタビューを行ったため、質問内容には日本かドイツか場所条件によって回答が変化するものがあった。そのため、今回のインタビューでは、すべての質問をドイツという場所設定で行った。

はじめに、「屋外食」に関する質問項目についての分析を行う。テラス席を使用する頻度については、「よく利用する」が3名、「たまに利用する」、「あまり利用しない」が各1名ずつという結果になった。5名中1名を除いて、全員がテラス席を定期的に利用することがわかる。同様に、テラス席と室内席を各状況に応じて座席選択の嗜好を問う設問では、テラス席と室内席に両方空きがある場合は、テラス席を選ぶ人数が他者を上回った。

このように、回答者の過半数がテラス席を好んで使う理由は、新鮮な空気(“frische Luft”)が吸えること、空気が爽やかであることが頻繁に挙げられている。次いで、天気の良い日は外に出たいという嗜好が多く挙げられた。

次に、テラス席を利用する際に歩行者の視線を気にするかどうかという質問では、4名が「いいえ」と答えている。自分の食べているものや、相手との会話を聞かれても「恥ずかしい」という感情を抱かないことが特徴的である。その他にも、「自分自身も歩行者の人間観察をするため、歩行者に見られても気にしない」、「歩行者は自分の事など見ていない」、「変なことをしていないのだから見られても恥じることはない」といった理由が挙げられた。このことから、「恥ずかしい」という感情について、日本人とは大きな違いがある。

「屋外食」を行う条件については、意見が割れる結果となった。「日陰の有無」と「虫がいるかどうか」という2つの項目が最も多く、次いで「自然の多さ」と「場所の清潔さ」、「静かさ」を選ぶ回答者がそれぞれ2名いた。その他にも、「景色の良さ」、「人通りの少なさ」、「灰皿の有無」などが挙げられた。「自然の多さ」に比較的重きを置くことからわかるように、ドイツ人の自然観は価値観の違いを理解するという点では、非常に重要な役割を果たすのではないだろうか。

自然観に関連した設問7では、3名が「はい」と答

えた。尚この問いには、人通りの多い銀座の歩行者天国の真ん中に設けられた、パラソル付きのテラス席の写真を回答者に見せてから、回答してもらっている。「雨宿りのついでに利用したい」、「ドイツにはないから面白そう」といった理由が挙げられている。しかし一方で、「人通りが多すぎて居心地が悪い」、「道路のど真ん中にテラス席があるのは邪魔な感じがする」といった否定的な意見も寄せられている。尚、「屋外食」に関して「非日常感」や「特別感」を抱くかという設問では、過半数の3名が「いいえ」と回答した。つまり、ドイツ人にとって「屋外食」が日常化していることが指摘できる。

次いで、インタビューの2つ目の項目である「歩き食べ」に関する設問の回答を分析する。「歩き食べ」の頻度について尋ねた設問では、「非常によくする」(1名)、「よくする」(2名)、「たまにする」(1名)と5名中4名が、肯定的な回答をしている。補足ではあるが、1名があまりしないと回答している。

食べ物と状況の組み合わせよっての「恥ずかしさ」を問う設問9では、すべてのドイツ人がすべての組み合わせに対して「気にならない」と述べている。また、問い11と12共に全員が「いいえ」と回答した。このことから、ドイツでは屋外で食べながらあることが、「行儀が悪い」、「マナー違反」といった認識はほとんど存在しないことがわかる。

以上のインタビューの回答分析を基に、ドイツ人がどのような価値観や行動様式を「屋外食」というテーマに対して持っているのかを整理しておこう。最も特徴的なのは、屋外で食べる際に「人の目」を気にしないことである。これはテラス席にも歩き食べにも言えることである。「お腹がすいたからその場で食べる」、「人の注意をひくような変なことはしないから恥ずかしがる必要はない」といった意見から、根底に非常に合理的且つ論理的ドイツ人の嗜好があるといえる。行動する際の規範が合理的か否かであるため、「屋外食」に対して恥ずかしいという感情が生まれることはほとんどないのである。また、彼らにとって「屋外での食べる」ことがごく日常的であることも、より頻繁にテラス席を使用し「歩き食べ」をすることの原因だと推測できる。

4. アンケート結果の日独比較とその背景

本章では、アンケート結果を日独間で比較することで「屋外食」に対する価値観の傾向の違いを理解し、その背景にある文化的慣習や思考を追求することを目的とする。中でも他者の視線に対する意識と、自然に対する思考や捉え方に大きな違いが表れたことから、以下ではそれら2つを中心に挙げる⁸。

設問2でテラス席を積極的に利用しない理由として、自然観に次いで「落ち着かない」「自分が食べている姿や食べているものを見られたくない」が挙げた。また、設問4でも全体の3割が他者の視線が気になるその理由として、「食べる姿を見られたくない」・「恥ずかしい」・「見られていると落ち着かない」といった記述をしていた。これらのことから、日本人は「屋外食」の懸念事項として周囲からの視線を挙げる傾向にあることが分かる。

一方ドイツ人は、「空気が新鮮」・「外のほうがすっきりする」・「爽やか」といった理由で積極的にテラス席を利用する。さらに、屋外で食べる際の人の視線に関しては「みられても別に平気」・「変なことはしていない」と、日本人と比較すると圧倒的に「気にする」という意見が少ない。つまり、ドイツ人にとって周囲からの視線はさほど個人に影響を与えないものであり、屋外で食べる際の障害とはならないのである。

これらの傾向の違いにおいて1つの原因として挙げられるのは、「恥」という概念である。日本には「恥じらいの文化」という独自の思想⁹が存在し、これは「世間¹⁰の目」や「他者の視線」が発端となって抱かれる。しかしながらドイツ人は「他者の目」によって行動の選択を行わない。個人主義が徹底され、合理的思考が評価される社会であることから「人に見られても気にしない」という考えを持ち、それに従って行動している。理屈さえ通ってれば、他人と違う行動や大勢に逆らうような行為も日本ほど問題視されないのである¹¹。

この日本の恥じらいの文化は「世間」という概念と相互に関係しあって形成されている。「世間」そのものは実態がないため、他者を通して個人に影響を及ぼす。その世間では、共有されている集団規範が存在し、他者からの視線を介してその規範とのズレを感じ取った時、日本人は「恥ずかしい」と感じる。この「恥ずか

しい」という感情が、道徳基準となり日本人の行動を規制する¹²。恥がこのように個を制御する役割を持つことは、設問10と11の統合分析において、マナーが悪いからではなく、恥ずかしいから「歩き食べ」を行わないという結果からも明らかである。

こういった「世間」のルールに反さないためにも、個人は常にその時のシチュエーションから許容される範囲の行動を見極めている。観光地という場所条件によってソフトクリームは「世間」で認知され許容されているが、通学路でしかも切られていないリンゴを食べながら歩くことは、ほかの誰もやらない、つまり「世間」の規範では認知と許容がされていない。しかし一方で「世間」自体が漠然とした準拠枠であるため¹³、その規範も文字化されていない。従って暗黙のルールのように他人の目を通して人々に影響力を持ち¹⁴、状況や条件によって良し悪しの境界線が変化するのである。

日本人とは対照的に、ドイツ人はどの状況で「歩き食べ」をしたとしても「気にならない」と回答している。これは前述のように、理屈が通ってれば多数派と異なる行動を選択しても問題はないという彼らの合理的性格が影響している。お腹がすいたら場所に関わらず食べることが通常であり、それに関して注意をしてくる人や規制するようなルールも存在しない。また、「屋外食」が日常の一部であり、習慣化していることも原因と考えられる。

世間と恥の構造に基づいて、他者からの視線と恥を感じる各状況について述べてきたが、設問9の回答傾向もまた日独間の文化の違いを色濃く表している。1人の場合は「歩き食べ」は「恥ずかしい」が、誰かと一緒であれば「気にならない」というその傾向から、日本特有の集団主義的思考が観察できる。井上¹⁵は、日本人が自分だけが世間の規範から外れることを恐れて世間体を気にしながら行動選択を行うと述べている。この根底には、日本人が特に不慣れな状況での失敗、規則違反をした場合に「世間」から排斥され、孤立し、面子を失うことに対して恐怖心があると考えられる¹⁶。

視点を変えて言えば、1人ではなく誰かと一緒であれば、多少規範に逆らっても気にならないのである。

設問4で歩行者の視線が「気にならない」ことの理由として「1人じゃないから」と記述する者もいたのはそのような心理の反映である。

「恥の文化」に加えて、大きな違いがみられたのは自然についての価値観である。日本人の場合設問2において「天候」・「気候」が最も多く、次いで「屋外家具の清潔さ」・「日焼け」・「虫」という総じて自然的な条件に票が集まった。さらに、数ある条件の中でも「自然の多さ」は最も重要視されていなかった。

しかしながら、ドイツ人は「居心地の良さ」・「自然の多さ」・「景色の良さ」などを重要な条件としてみなしているが、「天候」については「ある程度良ければ」と、それほど重視していなかった。このことから、日本人の自然観はドイツ人と比較しても全く違うことが分かり、「屋外食」に関する価値観の違いの背景をなす重要な要素であると言える。

そこで、この差異を比較し、この違いの背景を追っていく。まず「天候」と「気温」については、日本人にとって「屋外食」は非日常であり(設問6)、特別な機会であるが故に、居心地の良い場所で食事をしたいという思いが作用していると考えられる¹⁷。加えて雨が降っている場合、パラソルがあったとしても利用したくないという人が日本人の過半数を占めていたが、ドイツ人は利用してもよいという人のほうが多かった。こうした傾向の背景には、「雨は降ったとしても小雨であり、空気が乾燥しているため屋内に入ればすぐに乾く」というドイツ人の発言を念頭に置くと良からう。また、ドイツ人の多くが雨でも傘を差さない習慣も、こうした感覚の根底にあると考えられる¹⁸。

天候や気温に関わらずテラス席を利用するのは、インタビューにおいてほぼ全員が挙げていた“frische Luft”(新鮮な空気)の考え方も作用していると推測できる。この「新鮮な空気」こそ「屋外食」の醍醐味であり、最も重要な要素として挙げていることに特徴が求められる。新鮮な空気を求めて、極寒の冬にはストーブの近くで、雨が降っているときにはパラソルの下でテラス席を利用するのである。

「日陰の有無」が重要視されているのは、「美白」や「色白」といった肌の白さが評価される日本特有の美

意識が自然観に影響していると結果であるといえる。根拠として、インターネット上で行われた「日焼けに関する意識調査」¹⁹では、男女ともに肌を「焼かない派」が76.8%と大多数を占めており、「色白」であることへのこだわりが見てとれる。

他方、アジアに比べると夏でも天気の良い日が多く、日照時間の短いドイツの気候条件が、いい天気の下での「屋外食」を後押ししていると考えられる。(熊谷2004)²⁰ また日焼けをしているほうが健康的なイメージがあるという、日本とは正反対のドイツ的美意識も影響していると考えてよい。

「虫の有無」に関しては、インターネットで独身日本人女性600名に行われた防虫への意識調査²¹において、79.6%が「嫌い」、18.0%が「やや嫌い」と回答しており、その割合は97.6%とほぼ全員を占めている。このことから、日本人は虫に対してある種の嫌悪感を抱えていることがわかる。

一方、インタビュー対象者のドイツ人は日本人に見られるような虫の毛嫌いはなかった。彼らにとって唯一の例外ともいえる虫が蜂であり、気候がよくなると蜂が大量発生するために、屋外で食べる際には特に蜂の有無を気にするようである。

「自然の多さ」が日本人にとって「屋外食」の条件として重要視されていないのは、このように虫を嫌い、日焼けを気かけ、清潔さを第一に考える、彼ら特有の自然観の結果であると言える。つまり、日本人にとって自然は「居心地の良さ」を邪魔してしまう非常にネガティブなものとして捉えられている。

他方、ドイツ人は緑を好み、森での散歩や庭作業が休日の息抜きとして人気である。庭を持たない人までもが“Klein Garden”²²を借用し、庭仕事にいそむのである²³。ドイツでは新鮮な空気を吸うことができ、彼らの大好きな自然に触れながら食事を楽しむことができる、テラス席やピクニックといった屋外での食事が習慣化したと推測できる。

このように、日独で「屋外食」に関する価値観が異なる背景には、他者の視線の捉え方の違いと自然観の違いがある。日本人は「世間」という概念が共有されていることから、ドイツ人より他人の視線を集団規範

と自己とを比較する媒介物として気にしている。

他方、ドイツには「世間」というものが存在せず、徹底された個人主義と合理的思考に基づいて自己の基準で行動選択の判断を行う。そして、日本人にとって自然は屋外での食事の居心地の良さを減少させる厄介者であるのと対照的に、ドイツ人にとってはリラックスできる空間づくりに貢献する非常にポジティブなものである。

5.おわりに

本稿では「屋外食」という視点から日独の価値観の違いを明らかにし、その違いを形成する背景である文化について検討した。「屋外食」に対して肯定的なイメージを持っていない日本人とは対照的に、

ドイツ人は「屋外食」を好み非常に積極的に行う。この嗜好の大差には、背景に自然観と「世間」という要素が作用している。日本には「世間」と「恥」に起因する価値観と、消極的な自然観が根底にある。その一方で、「世間」という概念自体が存在せず、合理性と個人主義に従って行動選択を行うドイツ人的思考と、非常に肯定的な自然観が、彼らの「屋外食」への積極性やその習慣化に繋がった。

「屋外食」という新しい観点から、日独の食文化を皮切りにその背景にある文化的価値観を究明することができ、ドイツという他者と客観的に比較することで日本特有の文化を指摘することが可能となった。さらに、異文化と円滑に交流する際にはこのような背景にある文化的思考の相違の知識を活用すると良いのではないか。

参考書籍ほか

- 井上忠司 『「世間体の構造」:社会心理学への試み』 株式会社講談社 2007
- 今村武 『食事作りに手間暇かけないドイツ人、手料理神話にこだわり続ける日本人:共働き家庭に豊かな時間とゆとりをもたらすドイツ流食卓術』 ダイヤモンド・ビックス社 2019.
- 岩村偉史 『ドイツ人の価値観:ライフスタイルと考え方』 三修社 2010.
- 熊谷徹 『びっくり先進国ドイツ』 新潮社 2004.
- 中村陽吉 『世間心理学ことはじめ』 東京大学出版会 2011
- リチャード・ロード、武弓正子訳 『カルチャーショック13:ドイツ人』 河出書房新社 2001
- 木内洗雲・橋本都子 「居場所の選択とその「きっかけ」に関する研究:都市のパブリックスペースにおける行動観察および実験から」『人間・環境学会誌』16-2, 2014, p.8.
- 近藤直子 「ドイツの食卓と日本の食卓」『立教大学ドイツ文学科論集』35, 2001, pp.306-316.
- 山田隆信 「日本人と恥の文化」『目白大学短期大学部研究紀要』44, 2008, pp.1-4.
- 「エンタメRBB」<https://www.rbbtoday.com/article/2015/06/30/132772.html> (2019.10.8閲覧)
- 「SANSPO.COM」<https://www.sanspo.com/geino/news/20170526/pr117052611120029-n1.html> (2019.10.8閲覧)
- 「日本洋傘振興協議会ホームページ」<http://www.jupa.gr.jp/posts/view/21> (2019.10.8閲覧)

- 1 尚、本稿で「屋外で食べる」とは、レストランなどでご飯を食べる「外食」という意味ではなく、ピクニックやテラス席など、立地的な意味の「屋外で食事をすること」を指している。
- 2 岩村偉史『ドイツ人の価値観:ライフスタイルと考え方』 三修社 2010.
- 3 熊谷徹『びっくり先進国ドイツ』 新潮社 2004.
- 4 リチャード・ロード、武弓正子訳『カルチャーショック13:ドイツ人』 河出書房新社 2001.
- 5 今村武『食事作りに手間暇かけないドイツ人、手料理神話にこだわり続ける日本人:共働き家庭に豊かな時間とゆとりをもたらすドイツ流食卓術』ダイヤモンド・ビック社 2019.
- 6 近藤直子「ドイツの食卓と日本の食卓」『立教大学ドイツ文学科論集』35, 2001 pp.306-316.
- 7 本稿で「歩き食べ」とは、屋外で歩きながらものを食べる行為を指す。「食べ歩き」とは違って、食べることを目的とせず、歩くという行為のついでに行うことを指す。
- 8 尚、日本の恥じらいの文化について言及する際には、主に中村陽吉の『世間心理学ことはじめ』（東京大学出版会 2011）と井上忠司による『「世間体の構造」:社会心理学への試み』（株式会社講談社 2007）を利用する。両者とも、社会心理学的視点から日本人が恥を感じる動機や背景について巧みに論じている。
- 9 「世間」という言葉は日本特有の表現であり、欧米の言語に置き換えることができないという中村の主張からも、これが日本特有の文化であることが伺える。（中村 注 (8) 前掲書 p.iii）
- 10 「世間」とは、実体はないが、個人の人々によって身近な社会生活場面でなんらかの規範や常識や特定の立場のサンプルとして受け取られ、その規範や立場をもとにして、個人の人格や態度や言動などを称賛・批判、促進・抑制、受容・排斥といった働きかけを、代弁者である「他者」を介して、しかも個人の代理人である「自己」を通じて行うものであり、その過程を経て個人の主体である「私」と心理・社会的に交流する働きを、「実態」として実現している機能のこと。また、その心理・社会的機能の支え手として漠然とした多数の存在を仮定する概念のこと。（中村 注 (8) 前掲書 p.ix）
- 11 熊谷 注 (3) 前掲書 pp.12-14.
- 12 山田隆信「日本人と恥の文化」『目白大学短期大学部研究紀要』44, pp.1-4.
- 13 井上 注 (8) 前掲書 pp.52-68.
- 14 中村 注 (8) 前掲書 pp.97.
- 15 井上 注 (8) 前掲書 pp.235.
- 16 中村 注 (8) 前掲書 pp.84-90.
- 17 木内洸雲・橋本都子「居場所の選択とその「きっかけ」に関する研究:都市のパブリックスペースにおける行動観察および実験から」『人間・環境学会誌』16-2, 2014, p.8.
- 18 「日本洋傘振興協議会ホームページ」<http://www.jupa.gr.jp/posts/view/21> (2019.10.8閲覧)
- 19 「SANSPO.COM」<https://www.sanspo.com/geino/news/20170526/pr17052611120029-n1.html> (2019.10.8閲覧)
- 20 熊谷 注 (3) 前掲書 pp.24-26.
- 21 「エンタメRBB」<https://www.rbbtoday.com/article/2015/06/30/132772.html> (2019.10.8閲覧)
- 22 ガーデニング用の広い土地が小区画に分割された一区画（リチャード・ロード 注 (4) 前掲書 pp.223-225）
- 23 リチャード・ロード 注 (4) 前掲書 pp.231-232.

● アンケート参考資料



設問1

「食べログ」<https://tabelog.com/tokyo/A1310/A131002/13057238/dtlphotonst/4/smp2/#> (10月10日閲覧)



設問7

「Travel Note」https://travel-noted.jp/items/11590?image_id=BUWnygQhE1Q (10月10日閲覧)

屋外で食べることにに関するアンケート

年齢 ()

1. あなたはカフェやレストランのテラス席 (スライドの写真参照) を利用しますか?

よく利用する ・ たまに利用する ・ めったに利用しない ・ 利用したことがない

2. 1で「めったに利用しない」または「利用したことがない」と答えた方
なぜテラス席を利用しないのですか? (複数回答可)他人に気取っていると思われたくない ・ 外で食べることはマナーが悪い
落ち着かない ・ 天候や気温に影響される
自分が食べている姿、食べているものを見られたくない
その他 []

3. 以下の各状況でどのように座席を選択しますか? abcそれぞれに回答して下さい。

- a. 室内席 (空席有) + テラス席 (空席有) → 室内席 ・ テラス席
 b. 室内席 (空席有) + テラス席 (空席無し) → 室内席 ・ テラス席 (待つ) ・ あきらめる
 c. 室内席 (空席無し) + テラス席 (空席有) → 室内席 (待つ) ・ テラス席 ・ あきらめる

4. テラス席に座る際、店の前を通る歩行者がいる場合、視線を気にしますか?

その理由も合わせてお答えください。

はい ・ いいえ

理由 []

5. あなたがもし屋外で食事をする場合、どのようなこと念頭において場所を選択しますか? (複数回答可)

人通りの少なさ ・ 日陰の有無 ・ 虫がいそうかどうか ・ 自然の多さ
ベンチや机など状態、清潔さ ・ 景色の良さ ・ 静かさ ・ 居心地の良さ
その他 []

6. 屋外で食事をすることにに関して特別感や非日常感を覚えますか?

はい ・ いいえ

7. スライドの写真のような傘のあるテラス席である場合、小雨程度であれば利用してもいいと思いますか? (スライド参照)

はい ・ いいえ

8. あなたは屋外で歩きながらものを食べることがありますか?

非常によくする ・ よくする ・ たまにする ・ あまりしない ・ 全くしない

9. 以下の各状況と食べ物の組み合わせで、歩きながら食べる場合恥ずかしいと感じますか? どちらかに○をしてください。

[状況]	[食べ物]			
観光地	ソフトクリーム	→	恥ずかしい	・ 気にならない
通学中	リンゴ (丸かじり)	→	恥ずかしい	・ 気にならない
学内を移動中	おにぎり	→	恥ずかしい	・ 気にならない
駅のホーム	ハンバーガー	→	恥ずかしい	・ 気にならない

10. 9で1つでも「恥ずかしい」と答えた方

歩き食べをしている友人が隣にいた場合、恥ずかしいと感じますか?

はい ・ いいえ

11. 屋外で歩きながら食べることはマナーに反している、または行儀が悪いと思いますか?

はい ・ いいえ

12. これまで歩きながら食べることにに関して、注意を受けたことがありますか?

あるとすれば、誰に注意を受けたかを合わせてお答えください。

はい ・ いいえ

注意してきた人 []

ご協力ありがとうございました。